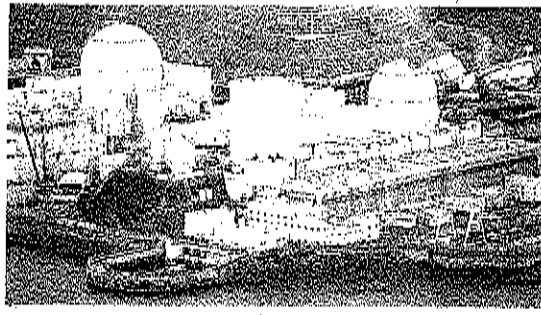


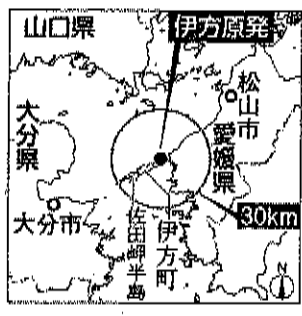
伊方原発3号機再稼働

トラブル響き、1年11カ月ぶり

四国電力は2日、愛媛県伊方町にある伊方原発3号機（出力89万キロワット）を再稼働させた。2019年12月末に定期検査で停止し



四国電力伊方原発3号機（左）
2020年3月、愛媛県伊方町、本社へりから



て以来、稼働は約1年11カ月ぶり。20年春に再稼働の予定だったが、トラブルで遅れていた。全国では現在、他に関西電力、九州電力の計7基が稼働中だ。

四電によると、3日には原子炉内で核分裂反応が連続する「臨界」に達する見通し。6日に発電と送電を始め、年明けの1月4日に定期検査を終了し、通常運転に入る予定だ。

定期検査入りに伴う今回の停止は当初、20年春までの予定だった。検査では、使用済みになったフルトニウム・ウラン混合酸化物（MOX）燃料を国内の商業炉で初めて取り出す作業も行った。

しかし20年1月、広島高裁が運転を差し止める仮処分決定を出し、21年3月に仮処分が取り消されるまで法的に運転できない状態が続いた。核分裂反応を抑える制御棒1本を誤って引き上げたり、電源が一時失われたりするなどのトラブルが続き、検査が20年1月末から6カ月以上中断。テロ攻撃などに対応するための施設の設置も21年10月に入らなかった。

半島の住民 船での避難想定も

伊方原発は、四国西端の佐田岬半島の付け根にあり、重大事故の際に周辺の住民が円滑に避難できるかが課題とされる。愛媛県の広域避難計画によると、原発から半径30キロ以内の人口は山口県の一部も含めて約11万3千人。半島の住民は船で大分県などに避難する

想定もある。伊方町の高門清彦町長は2日、長期停止期間からの運転再開であることから、四国電力にはこれまで以上に緊張感をもって、安全確保を最優先に今後の作業に万全を期してもらいたい」とするコメントを出した。

核燃料は計1699体。3号機プールの余裕は約220体分で、再稼働によって数年で満杯になる計算だ。このため四電は、使用済み燃料を「乾式キャスク」に入れて一時貯蔵する乾式貯蔵施設を新設する計画。25年2月からの一部運用開始を目指し、21年11月30日に

着工した。新規制基準下の商業炉での着工は国内で初めて。
(尾岡龍太)